

夢湧き、夢に夢中

第16号

令和4年1月17日 文責：大谷

「苦しいときは前進している」

今からちょうど四十一年前、当時小学六年生だったわたしは、テレビの前で、ひとりの高校生の“ワンプレー”に心を奪われた。

その当時、高校サッカー界は“三羽ガラス”と呼ばれた長谷川、大槻、堀池ら超高校級のスター選手と一年生エース武田を擁する清水東高校が、実力、人気ともに他を圧倒していた。そして、わたしも清水東の真っ青なユニフォームに憧れ、帝京高校との決勝戦に釘付けだった。誰もが清水東の日本一を信じてやまなかつた。しかし、清水東の一瞬の隙を突いて放たれた帝京のクロスボールが清水東のゴール前へ。これが絶対的王者だった清水東を倒し帝京を日本一に導いた“ワンプレー”であり、虹のような美しい放物線が、ひとりの少年の心を射貫いた。この選手こそ、平岡和徳先生（現宇城市教育長、大津高校サッカー部テクニカル・アドバイザー）である。

平岡先生との出会いは、今から約二十八年前。地元の中学校に勤務していたこともあり、多くの教え子たちが大津高校サッカー部に入部することになったのを機に、ご縁をいただき、以来サッカーのことはもちろん教師として、そして人としての生き方を数多く指南していただいた。そんな平岡先生との年月の中で、幾度となく掛けていたいた言葉がある。

「苦しいときは前進している」

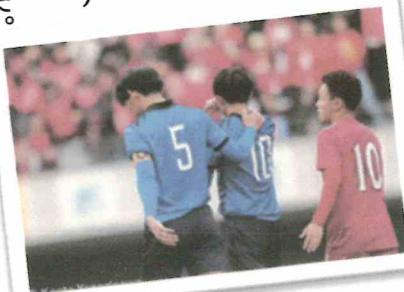
これまでわたしは悩んだり苦しんだりする度に平岡先生のもとを訪れた。そして、「苦しいときはほど人は前進しており、前進した先には必ず夢があるのだ」と説いていた。だいきた。さらに「夙は向かい風が強いときほど高く舞い上がるだろう。人も向かい風が強い（＝苦しい）ときほど、成長するものだと」。

「九州の、熊本の、この片田舎にある小さな公立高校が、いつか必ず日本中を驚かす日がくる」

出会った頃、こう語っていた平岡先生の夢が、三十数年の時を経て本当に現実になった。「夢を叶える」とは、長い年月を要するとても愚直な努力の継続なのかもしれないが、その先にこんなロマンがあるならば、わたしも、今からでも愚直でいい。

敗戦後、進化するブルー軍団（＝大津

高校サッカー部の愛称）は、さっそく大津町のグラウンドでボールを追いかけていた。そして、選手たちが身にまとっている練習着の青が、前にも増して輝いているようにも見えた。「苦しいときに前進、いや進化していることの表れか」とさえ思えた。と同時に、四十年前に少年が憧れた「真っ青」よりも、そのブルーは一段と美しかつた。前進している者の放つ光は輝いているのだ。



■3学期の始まりとともに、一段と厳しい寒さを迎えておりますが、保護者の皆様におかれましては御健勝にてお過ごしのことと拝察します。3学期は、3年生の入試をはじめ卒業式そして1、2年生の進級に向けて学校総体となって一致団結していく時期です。どうか保護者の皆様の御理解と御協力をお願ひいたします。